

可哀想な名前の花々

冬も近い日、裏庭を通り過ぎようとして、ふと目に留まった葉っぱは「ミゾソバ」かな、それとも、よく似ている「ママコノシリヌグイ」だろうか。さすがにもう葉や茎にトゲトゲはない。それにしてもママコノシリヌグイ（継子の尻拭い）とは酷い名前というか、言い得て妙なことに感心する。継母がにつくき継子の尻を、この鋭く固いトゲのある葉っぱで拭いたらさぞ痛かろうという、シンデレラ姫と同じ継子いじめの話と同じだから、思い描くことは世界に共通なのだろう。ピンクの小さな花が群れて咲くその姿はとても愛らしいのに、何とも可哀そうな名前である。

日本の花の名前は、ゴゼンタチバナ（御前橘）、ムラサキシキブ（紫式部）、オダマキ（苧環）、スイフヨウ（酔芙蓉）、と綺麗な名前に枚挙にいとまがない。秋桜にしろ、仮名でコスモスの表記では、さだまさしの詩も、あんなに人の心を打つこともなかった



ヘクソカズラ

気がする。そんな中であってなかなかどうして強面の名前も多くて面白い。

その代表格とも言える、ヘクソカズラ（屁糞葛）も夏の暑い盛りに道端の藪の中に、白と赤紅色との小さな可愛い花をつけて咲いている。つる性で、せっかく葛という日本的な名前を頂いたのに、いくら悪臭を放つからと言って、その上に屁だけでは足りずに糞というのだから酷すぎる。最近では留守になって荒れた庭も多くなり、つる性だから、そんなところにもどんどんはびこって、昔より多く見かけるようになった気がしている。

また、イヌフグリ（犬陰囊）というのもある。文字通り、この花の種が犬の陰囊に似ているのがこの名の由来らしい。これも春の訪れとともに、小さな青い可憐な花をいくつも咲かせる。しかし、最近、この在来種のイヌフグリはめったに見かけなくなった。代わって、春の陽を浴びていち早く地べたを這うようにして咲く姿を見かけるのは、オオイヌフグリと言って外来種であり、種は陰囊には見えない、というからややこしい。来年は是非、イヌフグリを見つけ、本物の犬の陰囊と見比べてみたいと思っている。

子どもの頃、外遊びをすると必ず洋服にくっつき、「バカ」と言ってなじんでいたのは、ヌスビトハギ（盗人萩）の種であるが、これも随分酷い名前である。種はいわゆるひつつき虫で、種の形が泥棒の抜き足差し足の足型に似ているというから、昔の人の想像力の逞しさに驚く。この花も今では、我が家の庭にも侵入し、花材にもなったりしている。秋らしい清楚なピンクの小さな花をつけるのでお気に入りの花の一つなのだ。花言葉は「略奪愛」というから、何ともヌスビトハギの名前にふさわしく、笑ってしまう。



ヌスビトハギ